

## 「VOCATION（天職）」 ～ガラス屋の三代目に生まれて



岡本硝子株式会社  
代表取締役社長

岡本 毅

ICU（集中治療室）で安らかに眠っているような先代である父の顔を見て、不思議と「VOCATION（神のお召しによる天職）」という言葉が浮かんだ。隣には、不自然に折れ曲がった父の足をさすりながら泣き崩れている姉がいた。その夜の日記には、「これからは一瞬たりとも、父が生きていたら、とは後悔するのは止めよう。ただ、父であったらどうしたんだろうかということとは行動の指針としても良いと思う」と記した。

それは、平成7年11月13日のことであった。埼玉県警察本部の刑事部長であった私は部内の会議に出席していた。午後3時過ぎ、突然ポケベルが鳴った。不思議だ、鳴らすべき人は全員会議に出席している、と思っている間も無く、再び鳴った。そのうち、部下であった次席さんが、「大変です部長。電話の向こうで泣いておられてよく分かりませんが、どうやらお父さんが自宅の屋上から転落したみたいです。」と、姉からの電話を告げてくれた。急いで、浦和から都内の自宅の近くの救急病院へ、（内緒であるが）サイレンを鳴らしながら緊急走行で向かった。車中、職業病とも言うべきか最悪の事態に対する心構えをする自分と、一人の息子として何とか一言だけでも最期に話したいと思うもう一人の自分がいた。病院の外で、搬送が終わった救急隊員の方に、「どうですか」と聞くと、隊員の方は静かに首を横に振った。

酒も煙草も嗜まない父は、幼い時から私にとって特別の存在であった。厳格であったが、私達子供のことを何よりも優先してくれた。私が幼稚園に入る頃には、健康のためと都心から空気の良い郊外の市川市に引っ越しをしてくれた。小学生の頃には、台風が来ると、当時ゼロメートル地帯である亀戸にあった工場が浸水し炉が駄目にならないかと、長靴を持って夜中に出て行く父の後姿があったが、休みの前などの時は、遠足気分の私も連れて行ってくれた。また、私が都内の私立高校に入学すると、自分の通勤時間は倍近くになるのに、通学のためにと学校の近くの広尾に一家で転居してくれた。

大学を卒業して、警察庁を就職先に選んだ時は、「勘当する」とまで反対されたが、そ

の後は、陰ながら応援してくれた。役人の給料は少ないだろうからと、生活費を援助してくれた。最初に京都に赴任した時は、寮に布団まで届けてくれた。最後の浦和に単身赴任した時も、そと官舎に立ち寄ってくれた。近くに用事があったから寄ってみたとの書置きを残して。わざと作った用事であった。

そんな父の後を継いでから9年が過ぎようとしている。最初の頃は、ガラスのガの字も知らず、何とか父を越えてやろうと肩に力も入ったが、「オヤジは超えられないものだ」と諦めた時から、会社の方も軌道に乗り始めた。技術屋ではない私には、かえって、ガラスに不可能なことはないと思えてきて、ガラスの無限の未来が見えるようになってきた。生意気にも、無機質、非晶質といった従来のガラスの定義・概念にこだわることなく、「コンテナ（容器）」として有機物を含有するようなガラス、結晶質のガラスといったものに挑戦してみたいとも思うようになってきた。また、「20世紀は電気の時代だとしたら21世紀は光の時代、光に一番相性の良い素材はガラスである」と言ったような考えも信念に変わってきた。さらに、「地球から生まれ地球に戻る」という意味で、ガラスは環境に最も優しい素材であるとの確信も生まれた。そう言えば、ガラス屋として生まれガラス屋として死んだ父の骨壺も当社製のガラスで作ったが、既に地球に戻りつつあるのだろうか。

この9年間、個人的には、叶わぬ願いとは知りつつも、「毅、良くやった」との父の一言が欲しくて頑張ってきたような気もする。お陰様で、平成11年には天皇陛下の行幸の荣誉に浴することもでき、平成13年には「ニュービジネス大賞最優秀賞」を始め数々の賞も頂けるようになった。さらに、昨年には、JASDAQに上場することができた。私が会社を継ぐことを諦めかけていた父が知ったら、さぞ驚き、そして、何よりも喜んでくれたことであろう。ただ、役人を途中で止めたことについては何と言ったであろうか。家業を止めてPublic Companyになったことについてはどう思っているのだろうか。

ICUでの「VOCATION」は、神の声ではなく、自らの身を賭した父の最期の訴えかけであったのかもしれない。